



電子化にあたり、ファイル形式は、Adobe 社が開発した文章表示用のファイル形式である PDF とした。電子化された書類のフォーマットとしてはデファクトスタンダードであり、閲覧用のソフトウェアが容易に入手できるためである。過去のセンター報告を解体し、スキャナーで読み込み、論文ごとのファイルを作製し、PDF を製作した。

### III WWWでの公開

センター報告が PDF 化される以前には、過去のセンター報告の目次は、インターネット上では一部しか公開されていなかった。そのため、目次の HTML 化を最初に行い、そこから各論文の PDF ヘリンクを張った (第 1 図)。その URL は、[http://www.suiri.tsukuba.ac.jp/new/publication/bull\\_terc.html](http://www.suiri.tsukuba.ac.jp/new/publication/bull_terc.html) である。今後、変更される場合もあるが、その場合は、陸域環境研究センターのホームページからリンクをたどっていけばアクセ

スできる。

過去の論文の著者やタイトルがウェブサイトに掲載されたことで、<http://www.google.co.jp> などの検索サイトから、論文を検索することも可能となった。現在、印刷所に入稿した原稿は、紙の冊子体と PDF ファイルとなって納品されている。その PDF は陸域環境研究センターのウェブサイトで即時公開されている。

### IV 今後の課題

研究論文がどれだけの人に読まれているかは、論文の価値を測る上で重要な要素である。紙媒体の論文は、引用回数などで流通の程度を追跡することは可能であるが、どれだけの人に読まれているかは知ることはできない。しかし、サーバー上のファイルのダウンロード回数は可算で、その数値から過去の研究内容を再評価することが可能になると思われる。

今回の作業でスキャンニングされた論文は、



第 1 図 公開されているセンター報告の目次

## 文献

画像として PDF になっている。そのため論文中に含まれる語句で検索をすることはできない。これらのファイルから、OCR ソフトをつかってテキストファイルを作成し、画像ファイルとともに PDF を作製することで、より詳しい検索が可能となる。今後、過去のセンター報告をより流通させるために、この作業が必要であろう。

論文の電子化を行ったとき、論文間をリンクで結ぶことによってその利便性が向上する。センター報告には、保有している大型施設を利用した研究が多く掲載される。これらの研究は、それまでの研究成果や技術の蓄積を利用した研究が多い。WWW 上で、過去の論文にリンクを張ることにより、その研究の継続性や技術の進歩を容易に閲覧できるようになる。今後取り組むべき作業であろう。

現在、すべての論文が著者から公開の承諾を取ってはいない状況なので、全論文の公開には至っていない。今後、継続して公開の承諾をとる作業を続け、より有益なデータベースとなることが期待される。

- 尾身朝子・時実象一・山崎 匠 (2005)：研究助成機関とオープンアクセス— NIH パブリックアクセスポリシーに関して。情報管理, **48**, 133-143.
- 国立情報学研究所 (2002)：研究紀要公開のための著作権処理手引き。国立情報学研究所。  
<http://www.nii.ac.jp/nels/copyright.pdf>
- 高木和子 (2004)：世界に広がる機関レポジトリ：現状と諸問題。情報管理, **47**, 806-817.
- 中野明彦 (2005)：学会誌の電子ジャーナル化から冊子体の廃止まで—日本細胞生物学会 Cell Structure and Function 誌の場合。情報管理, **48**, 1-6.
- nature publishing group (2005): NPG library News. <http://www.natureasia.com/japan/institutions/new-14.php>